

空間的前後関係と時間的前後関係

— 言語表現における二つの〈前後〉の逆転現象について —

本多久美子(早稲田大学大学院)

1 はじめに — いくつかの前提と問題の所在 —

空間概念と時間概念とは、前者をその原本とし、後者を前者の転用とする理解が一般に共有されている。それは、言語(以下の記述は日本語を対象とする)表現においても、空間概念をあらわす語類や文法形式が時間概念をあらわすそれとしても機能するという事実のうちに理解される。例えば、本来的に時間概念に属するような事態生起の時点指示に関わる文法形式としては、空間的存在表現の形式が用いられる。そこに、空間概念と時間概念とのある種の平行性を見ることができる。

しかしながら、空間概念と時間概念とは、決して等質のものではない。両者の質的な差違は、後者における量性および方向性の存在に還元される。もちろん、空間概念そのものが静的概念であるとしても、その空間概念の中に量性や方向性が存在しないわけではない。しかし、空間概念における量性、すなわち、空間的運動量は、空間概念の存立を根拠づけるようなものではない。また、空間概念における方向性も、ある運動が任意の方向性を伴うことの反映にすぎない。これに対して、時間概念における量性の存在は、その量性こそが時間という抽象概念の存立を根拠づけるものとしてある。「月日が過ぎる」や「時が去る」といった言語表現に顕著に見られるように、時間は、運動量としての量性そのものとして認識される。(こうした時間的経過をあらわす表現において、「過ぎる／去る」などの空間的移動をあらわす動詞類が用いられることは、時間概念と運動量との関わりを如実に示す。)さらに、これらの「過ぎる／去る」に典型される移動の方向性、すなわち、認識対象としての時間の方向性は、〈私〉の前方から後方へと向かう性質を持つ^[1]。

空間概念と時間概念とにおけるこのような量性および方向性のあり方と関わりを持つと考えられるのが、空間的〈前後〉と時間的〈前後〉との逆転現象である。

空間的〈前〉とは、言うまでもなく、〈私〉の身体性との関わりにおいて規定される〈私〉の眼前に位置する空間にほかならない。一方、時間的〈前〉とは、〈私〉との関わりにおいて、その〈私〉の背後に位置するものとして認識される。これは、過去・現在・未来を、〈私〉を現在として、過去を〈私〉の後方に、未来を〈私〉の前方に位置させたものであり、時間を直線的な流れとして認識する我々の時間概念を反映するものである。このように、空間的〈前〉と時間的〈前〉とは、直観的には、〈私〉の前方と後方とに对称的に位置するものであり、さらに、空間的〈前後〉と時間的〈前後〉もまた、その関係のあり方において対称性を持つものとなる。このことを先に「逆転現象」と述べたのであるが、両者の関係は、果たして逆転として捉えるべきものなのであろうか。また、それ以前に、直観的に我々が両者の関係を逆転として認識する要因は、どこに求められるのであろうか。それらの問題を考察するにあたり、まず、空間概念と時間概念との相関関係について、若干の言語事実を確認することとする。

2 空間概念と時間概念との相関

2.1 空間的存在と時間的存在

空間的存在は、モノの存在をその典型とする次のような文によってあらわされる。

(1) ユーフラテス川のほとりにバビロンの遺跡がある。／東方に白い水の流れる理想郷がある。

ここにあげた文は、存在詞「ある」を用いた存在詞文であるが、存在詞文は、基本的に空間的位点(存在

空間)と存在対象物との二項によって構成される。この存在詞文形式によってあらわされるものは、モノの空間的存在に限らない。次のような出来事存在もまた、この存在詞文形式によってあらわされる。

(2) 今月の初めに一つの自然葬があった。／昨年二月にリレハンメルでオリンピックがあった。

出来事存在をあらわす存在詞文は、時間的位点と出来事存在との二項によって構成される。ある出来事がその出来事生起の時間的位点に位置づけられることによって、(2)の文は、動詞述語文に相当するような分析的な時間性を帯びることになるが、そのような出来事生起の時点と出来事との相関は、次のような時点指示副詞と動詞述語文によってあらわされる事態との相関に等しい文法的価値を持つ。

(3) 今月の初めに一つの自然葬が行われた。／昨年二月に冬季オリンピックが開催された。

このように、空間的存在表現の形式によって、出来事の生起は時間的連鎖の中に位置づけられる。

2.2 空間的距離と時間的距離・時間的速度

運動量の一実現形態である空間的距離と、それを運動の所要時間によって測った時間的距離、および時間的速度との間には、次のような対応関係が見出される。

(4) 水星は太陽に最も近い。／遠くの親戚より近くの他人。／遠く富士を望む。

(5) 歩いて行くのが一番近い。／近道。／遠回り。

(6) 春が近い。／近く、臨調答申が提出される。／遠く平安時代の昔から。／遠い将来の夢。

形容詞「近い／遠い」は、空間的存在表現として捉える限り、存在空間と存在対象物とが、ある空間的距離を隔てた関係にあることをあらわすが、両者の間の空間的距離は、単に両者を直線で結んだ距離を意味するわけではない。空間的距離の認識は、多くの場合、時間的距離の認識を伴う。(5)は、そのような時間的距離の大小を内包する空間的距離の大小をあらわす。そして、(4)と(6)とにおいて、空間概念と時間概念とは、前者を根拠とした対応関係にあるものとして理解される。また、空間的距離と時間的速度との反比例関係を含意するものとして、形容詞「はやい／おそい」をあげることができる。

(7) 眼球を速く動かす。／月日のたつのは早い。／審理の運びが遅い。／処理速度が遅い。

(8) 今年は桜の開花が早い。／朝早く、家を出る。／月の出が遅い。／夜遅くまで、勉強する。

(7)は速度の大小をあらわすが、この速度的大は所要時間の小を、速度的小は所要時間の大きをもたらし、そして、そのような所要時間の大小が時間的経過の大小として把握されるのが(8)である。さらに、上述のように、量としての時間的経過は空間的距離と等価なものであり、この(7)(8)においても、時間概念と空間概念との対応関係を確認することができる。

2.3 空間的前後関係と時間的前後関係

ある種の因果的な時間的前後関係は、空間的前後関係そのものとして表現される。

(9) クーデター事件の背景にはソ連経済の混乱があった。／円安の背景には、景気回復の観測とそれに伴うドル高がある。／成功の陰には技術者たちの努力があった。

存在詞文形式を用いた因果的な時間的前後関係の表現は、既に実現している<果>の「後ろ(背景/陰)」に<因>が存在すると述べるもので、この時、<私>の認識空間において、<因>として時間的に先行する事態は<私>により遠く、<果>として時間的に後行する事態は<私>により近く定位される。言うまでもなく、このような存在詞文形式は、基本的には空間的存在表現の文形式である。そのような空間的表現において、相対的により古い時間は<私>の遙か前方に、より新しい時間は<私>に近く定位されることになる。ここに、我々の持つ時間概念とは矛盾するような、純粹に空間概念として把握された時間概念が分析されるのであるが、このような問題に手がかりを与えるのが、空間的「先」と時間的「先」との関わりである。

3 空間原理による時間把握

前節において述べたように、空間概念と時間概念との間には、語彙的レベルから文法的レベルに至るまで、様々な対応関係が見出された。ここでは、2.3 においてふれた空間的に認識される時間概念のあり方について、「先」を例として考察する。

- (10) ① Yは私より 300 メートルほど先を走っている。② このままのスピードが保たれるなら、Yは私より先にゴールに着くはずである。③ 25 秒後、Yは私より先にゴールインした。④ その時、ゴール上のYは私より 300 メートル先にいた。(説明の便宜のため、各文に番号を付した。)

上掲の(10)における四つの「先」は、空間的「先」(①と④)と時間的「先」(②と③)とに類別することができる。①で、私の 300 メートル「先」を走り続けるYは、ある時点 t_1 において空間的な「先」に位置するが、この時「先」は私の前方をその領域とする。そして、②が t_1 における発話であるなら、Yはゴールへの到達を「先」に獲得することになるが、この時間的「先」もまた、①の空間的「先」との重なりにおいて私の前方をその領域とする。このことはYがゴールに到達した時点 t_2 においても変わらない。 t_2 においてYは空間的「先」に位置する(④)とともに、ゴールへの到達を「先」に獲得する(③)。このことは、空間的「先」に位置することが、事態実現の側から見ればそれが時間的に「先」に生じることを意味するが、このように「先」が空間概念と時間概念とをあらわし得るのは、両者がともに<私>の前方のある空間内において成立するものであることに起因すると考えられる。時間的「先」は、空間的「先」であることにその成立原理を持つのである。このような時間概念のあり方を、空間原理による時間把握と呼ぶ。(空間的「先」と時間的「先」との一致は、現在において持たれる現在としての<此处>および<下>、現在において持たれる過去としての<前>および<上>、という時空認識との重なりを示唆する[2]。)

このような空間原理による時間把握において、二事態の継起は、相対的に「先」に起きた事態をより「先(さき)」に、相対的に「後」に起きた事態をより「後(あと)」に位置づけることになる。これを<私>との関係から見ると、「先」に起きた事態は<私>により遠く、「後」に起きた事態は<私>により近く定位されると言い換えることができる。このような二事態の継起関係は、主として二事態の先後関係が問われる時、言語表現として成立しやすい。例えば、「先」を用いた二事態の先後関係表現は、その二事態が密接な時間的先后関係を構成する場合にとられる表現形式である[3]。(cf.「ころばぬ先の杖」[4])

空間原理による時間把握は、このように、空間概念を根拠としてその枠組みの中で時間概念を形成するものである。言うまでもなく、このような時間概念は、理念的な過去・現在・未来という時間原理そのものによる時間把握を前提とするものではない。次に、この空間原理による時間把握と対立する、時間原理による時間把握について見ることにする。

4 時間原理による時間把握

言語表現に見られる我々の時間認識のあり方は、<私>の前方から後方に向かって時間(事態)が「流れ去る」というものである。時間に対するこのような認識は、事態の時間的経過を時間そのものの経過に重ね合わせて捉えるものであり、そのことによって、より早く生じた事態をより古い事態として、より遅く生じた事態をより新しい事態として、理念的な過去・現在・未来という時間的連鎖の中に定位することを結果的に可能にするものである。このような理念的な時間の枠組みと共存し得るような時間概念のあり方を、時間原理による時間把握と呼ぶ。既に明らかのように、先述の空間原理による時間把握とこの時間原理による時間把握とは、その時間概念のあり方に大きな相違を持つ。それは時間概念の成立そのものに起因するのであるが、時間(事態)の流れ去る方向が前者と後者とでは逆転するのである。

先掲の(10)の例に戻るなら、 t_2 において実現した事態は、例えば三日後のある時点 t_3 においては、過去時に位置するものとなる。その時、既に実現した事態の過去時 t_2 への定位作用は、時間そのものの流れが意識されるなら、＜私＞の後方に向かってなされるほかない。理念的な時間意識の存在は、そのような過去時への定位作用を不可避なものとする。この時、空間的前後と時間的前後との逆転現象は起こる。それは、空間原理に成立根拠を持つ時間概念から、時間原理に即した時間概念への翻訳の結果と見ることもできる。

しかし、空間原理による時間把握と時間原理による時間把握との間には共通性もまた見出すことができる。それは、「過ぎ去る」ものの実体をめぐる認識にあらわれる。前者において「去り行く」ものはモノや事態そのものであり、また、後者においても「過ぎ行く」ものは、生起した事態そのものである。(もちろん、そのような事態が＜私＞の後方へと過ぎ行くのは、認識される時間が同じ流れの方向を有するからにほかならないとしても。)

5 おわりに

言語表現としての時間的前後関係は、空間的前後関係の把握を根拠とし、その概念的枠組みの中において整合性を持つ。これに対して、理念的な時間体系は、そのような空間概念を根拠として成立するものではない。このような二つの対立する時間把握(空間原理による時間把握と時間原理による時間把握)は、空間的＜前後＞と時間的＜前後＞との逆転を惹起することになる。それは、本来的に異質な時間概念の保存・対立の結果でもあろう。本稿は、それを言語事実の側から指摘するにとどまる。

注

- ①＜私＞という表記は、認識主体としての私、すなわち、発言的現在・此处としての私を意図する。
- ② 現時の中の過去＝＜前・上＞、現時の中の現在＝＜此处・下＞とする理解は、川端(1967)に基づく。
- ③ 「先」を用いた二事態の先後関係表現として、「…もの言はぬ先にわれは依りなむ…」(万葉 3795 歌)の例が見える。
- ④ 「ころばぬ先の杖」に見られるように「A＝ぬ先B」という否定形式を伴うのは、「ころばぬ」という否定事態Aが事態Bの後に起きることとして関係構成されているためである。

資料

本文中に引用した用例は、“朝日新聞一天声人語・社説”(電子ブック版、日外アソシエーツ)に拠る。なお、データ抽出プログラムの作成にあたり、本多則夫の協力を得た。

参考文献

- 森田良行(1980)。“基礎日本語 2。”角川書店、pp.433-444。
- 川端善明(1967)。“場所方向の副詞と格(上)―述語の層について その二。”国語国文, 36(1), 京大国文学会, 1-31。
- 真木悠介(1980)。“古代日本の時間意識―時間の比較社会学(二)。”思想, 677, 岩波書店, 88-101。
- D. デイヴィッドソン(1990)。“行為と出来事。”服部裕幸 柴田正良訳, 勁草書房。
- 本多久美子(1994)。“「ニ」―その文法的機能について。”早稲田日本語研究, 2, 早大国語学会, 30-45。
- 本多久美子(1994)。“隠喩の実現―従属句の副詞的側面と修飾的側面との関連における。”国語学, 179, 国語学会, 15-26。
- 本多久美子(1995)。“月の満ち欠け―空間量表現の一形式。”文学研究科紀要 別冊 21 輯, 早大大学院, 193-202。

付記

本発表に際し、意味論研究会諸氏(宋永彬, 大塚みさ, パトリシア・ウェルチ, 神崎享子)の忍耐と助言に謝意を記す。